

9．神秘的な蛇（ミンダナオ）

昔々、数年前に愛する妻を失った貧しい農夫がいました。彼は広い畑を持っていて、そこではカボチャを育てていました。その地方では、それが唯一の野菜であり、彼の育ててみようとした、他のどの作物も、大量の昆虫や害虫のために、やられてしまっていました。

この農夫には、イスタルという名の魅力的な娘がいて、美しいだけでなく、落ち着いた親切な心を持っていました。それは、彼女が大変尊敬し、愛していた、父や先立った母と似ていました。イスタルは小さな村のすべての人に好かれていましたが、それは彼女の親切な性格によるものでした。

イスラルには、叔母がいて、彼女の父の家の隣りに住んでいました。しかし、この叔母は悪く、貪欲な女で、シェンという娘がいました。この娘はイスタルと同年で、良く似ていました。大変似ているので、他の村人はしばしばイスタルとシェンを見間違え、双子のように見えていました。しかし、叔母のようにシェンは悪く、貪欲で、冷酷な心を持っていました。彼女も叔母も、イスタルとその父に嫉妬を抱いていて、常に、ふたりをいじめる方法を考えていました。

ある日、イスタルは父の畑へカボチャを何個か夕食のために手に入れに行きました。彼女は一番大きなカボチャを見つけるために、畑を探しましたが、彼女の背後に、誰か、何者かが、這っていることに気付きました。彼女がそのあたりを見回すと、彼女は、突然、目に見えたものを恐れて、動けなくなりました。彼女の前に現れたのは、巨大な蛇でした。それは、彼女と同じ背の高さで、その体はうろこで覆われていました。蛇の冷たく黒い目が、彼女に向かってにらみつけ、そして、ふたまたに分かれた舌が口から匂うものに矢のように飛んで行きました。

イスタルは、叫んで走り去りたかったのです。しかし、彼女の体全体が、恐れのために凍りついて、筋肉が動きませんでした。「恐れてはいけな

いよ。イスタル。私はあなたを傷つけはしない。」と巨大な蛇は言いました。恐れていた少女は驚きました。蛇が話すんですから。そして、それ以上に驚いたのは、蛇が彼女の名前を知っていたことです。イスタルは、その蛇に答えるのが恐ろしくなりました。と言うのは、彼女の村では、もの言えない動物に話しかける者は誰でも、たちどころに光によって死ぬ、と言われていたからです。

蛇は続けて、「私はあなたとお父さんをととも元気にすることができます。」と言いました。イスタルは彼女の勇気を呼び起こして、低い声でつぶやいて、蛇に質問しました。「あなたがどうやって私たちを元気にできるのか、尋ねてもいいですか。」

「いいよ。」蛇は言いました。「あなたとあなたのお父さんの生活は、大変でした。特にあなたのお母さんが亡くなってからは。私はあなた方両方をたいへん金持ちにすることができます。もし、私の言うとおりにするならね。」するとその蛇はアゴを広く開けて、危険なキバを見せながら言いました。「さあ、君の手を私の口の中に入れてみなさい。」

当然、イスタルは彼女の手を大きな蛇の口に入れるのを恐れました。しかし、彼女には蛇の要求に抵抗することはできないと思って、そして、ゆっくり彼女の手をその蛇の口に置きました。気をつけて、蛇の鋭い有毒なキバに触らないように。そして、彼女は巨大な口から手を移動させました。

「さあ、これから、」大きな蛇は言いました。「ただ、あなたが、しなければならないことは、きれいな水で手を洗うこと。そうすると、言い表せない富があなたの指先から流れ出ます。金はあなたの左手から、そして、銀はあなたの右から。もし、富を止めたければ、ただ、あなたの指先を傾けることです。」

イスタルは、何か呆然として、全く蛇の言葉を聞いていませんでした。「しかし、慎重にきなさい。」と蛇は警告しました。「多くの人が、あなたとあなたの富を嫉妬します。そして、何とかして、あなたからそれを盗み、あなたとあなたのお父さ

んを殺そうとするでしょう。もし、そのようなことが起こるなら、忍耐し、あなたの心を、純粋に、忠実に保ちなさい。最後には、すべてのことがよくなります。

大きな蛇は、するとイスタルの手を、長い分かれた舌でやさしくなめて、すぐに消えました。何が起こったのか、蛇のことは真実のものなのか、あるいは、夢想だったのか、イスタルには信じがたいことでした。彼女は頭を振って、正気を取り戻し、夜の食事のための大きなカボチャを見つける仕事を続けました。

イスタルは、彼女の質素な家の台所で、カボチャを洗い始めました。父が仕事から帰ってくるまでに、夕食の準備をしようとしたのです。ところが、おかしいことが起こりはじめました。イスタルの手が、台所の流しの水にさわると、彼女は、その手と指がビリビリしました。彼女の手は、制御できないくらい、震えはじめました。彼女がびっくりして見ていると、彼女の左手はすぐにオレンジ色に輝き、右手は不思議な白い光に輝きました。そして、何か全く説明のつかないことが起こりました。金貨が彼女の左手から、そして、銀貨が右手から落ちてきたのです。イスタルは、自分の目を信じられませんでした。巨大な蛇の言葉が現実になったのです。夢想でも何でもありません。

落ちてきた金と銀の硬貨が台所の床を覆いはじめました。イスタルは心を取り戻し、指先を曲げました。すぐに硬貨は彼女の指からのしたたりをやめました。栓は止まって、彼女の手は、輝きを止めました。そして、イスタルの父はその家に入り、台所に敷かれた金銀の硬貨を見ると、ものが言えなくなりました。

その時から、イスタルと父は、その地の、最も富を持った者になりました。どんな時でも、お金が必要なら、イスタルはただ新鮮な水で手を濡らし、あとは何千何万という金貨と銀貨が、彼女のかがやく指先から飛び出し、彼女が指を傾けて、流れを止めるまで続いたのです。

すぐにイスタルと彼女の幸せな父は、大きな豪フィリピンの神話と伝説 9 . 神秘的な蛇

邸に移り住み、何十人もの召し使いと、生活を快適にする、望んだものを手に入れて住みました。利己的な心にはならず、彼らは、悪い叔母とつめたい心の娘シェンを招いて、たくさんの寝室のある豪邸に、共に生活するようにしました。

しかし、当然、イスタルの悪い叔母と彼女の娘シェンは、イスタルと彼女の父を大変ねたんで、しきりに、イスタルと彼女の父をだまして、彼らの新しい家から離れて、それを彼ら自身のものにする方法を計画していきました。

ある日、偉大な長官の息子が、東の彼の地から、旅をして、イスタルと彼女の父の豪邸に来ました。なぜなら、彼は、彼らの計り知れない富の話を聞いたからです。彼は名をカルティと言い、何日も海を旅して、指から金や銀を流す、若く美しい少女の噂が本当かどうか、見に来たのです。

カルティは、イスタルの僕によって、豪邸に案内されました。彼が美しいイスタルに会った時、彼は、すぐに彼女の美しさに感銘を受けました。彼女も彼のすばらしさに同様でした。その若い男がイスタルに、彼女が本当に金と銀を手から出せるか聞くと、イスタルは、ただ笑って、新鮮な水を飲みたいか、カルティに問いました。東からの男のために、杯に水を注いで、彼女はわざわざ彼女の手で水を流しました。カルティのびっくりした目の前で、イスタルの手は揺れ始め、輝きました。金と銀の硬貨が彼女の指先から出始めるまで。

カルティは、イスタルの美しさと思議な力で、彼はすぐにイスタルの手を取って、彼女の父に結婚を頼みました。イスタルの父は、カルティと彼女の娘との結婚に祝福を与え、若いカップルは大変幸せでした。すると、カルティは、イスタルに何の贈り物が必要か、聞きました。その頃、花婿になる者は、将来の父に、何でも求めるものをプレゼントすることになっていました。イスタルの父は、カルティに「もし、君が八頭の銀鬚の馬と、八本の金の取っ手のついた剣を持って来たなら、君は私の娘を君の妻にできる。」と言いました。

八日過ぎて、熱意のあるカルティは、八頭の馬と八本の剣を剣をイスタルの父に贈りました。父

は大変感銘を受けて、彼は金の取っ手のついた剣の一本をカルティに返して、言いました。「いつも、この剣を持っておいて、私の娘を守るために使ってくれ。」

数日の内に、カルティとイスタルの壮大な結婚式が行なわれ、結婚の宴には、八百人の人々で、八日間続いて行なわれました。イスタルが結婚について受ける注意は、ただイスタルの悪い叔母のことでした。彼女は、今まで以上に嫉妬を燃やしていたのです。

結婚の宴が終わると、カルティは、新しい花嫁と彼女の父、悪い彼女の叔母とその娘のシェンを東への旅をし、そこで彼と住むように招待しました。そして、次の日、彼らはみんな豪邸から、長い東方への旅に出ました。

カルティの船に乗っての長い海の旅の中で、悪い叔母はイスタルを殺し、彼女の父の富を支配するためのずる賢い計画を実行に移し始めました。カルティが船の甲板で忙しい間、彼の船員たちのために、クリンタンという楽器を奏で、彼の新しい妻は、デッキの下の船室でひとりで寝ていました。密かに叔母と彼女の娘は、イスタルの船室に這って行き、彼女に猿ぐつわをし、手と足をロープで縛りました。どうすることもできないイスタルは、叫ぶ時もなく、あがく力もなく、悪い叔母とシェンは、イスタルの体を船から深い海の中へ投げ込みました。そして、シェンは、イスタルの服を着て、彼女のふりをし、彼女の富を奪おうとしました。

なぜなら、イスタルとシェンはそっくりで、カルティは何も怪しまず、自然と本当の妻のふりをし、イスタルが無常にも船の外へ投げ出されたことにも気付きませんでした。

しかし、悪いごまかしは、そんなに長く続きませんでした。彼らが東のカルティの家に着くと、彼は妻が以前ほど活発で、暖かな心を持っていないことに気付きました。しかし、最初は長い旅の疲れによるものだろうと思っていました。しかし、彼の妻が清い水で手を洗っても、金も銀も彼女の指先から出ないので、何かが間違っている、と疑フィリピンの神話と伝説 9 . 神秘的な蛇

ったのです。

カルティがイスタルの父を呼んだ時、彼の娘はもう指先から富を出さないと告げ、父はもう一度水をカルティの妻の手に注いで、金と銀を出すように命じましたが、出てきませんでした。カルティはすぐに怒り、新しい妻と彼女の父が、彼に詐欺をしたことをとがめました。彼は大変怒り、苦しみ、彼はすぐに激しい勢いで家を出て、近くに停泊していた彼の船の方に走って行きました。彼は寝ている船員を起こして、航海の準備をすぐにさせました。カルティは、苦しみと怒りを乗り越えるため、忘却の旅をしたかったのです。

その間、イスタルは奇跡的に海の苦しい体験を生き延び、小さな島の浜に安全に着いたのです。彼女は浜で二枚貝や貽貝を集めている老女に見つけられました。その老女は、疲れきったイスタルの意識をもどらせ、彼女を助けて、島の簡素な小屋に連れ帰りました。そこで、何日も老女は弱ったイスタルを助けて健康を取り戻させました。

イスタルが完全に回復した時、彼女は老女に恩返しをして幸せでした。家で助け、小さな庭を世話し、毎朝海岸から会を獲って来て助けてました。そして、このような親切な心の少女が、彼女と共にいて、助け、雑用をし、友達を助けているので、その老女も幸せでした。

そしてある日、目の落ち窪んだ、髪がボサボサの、ひげが伸びた若い男が、ボロを着て、老女の家に来ました。彼が老女に言うには、彼が乗って旅をしていた船は、ひどい嵐にあたり、海にほうり出された。彼は、島の浜に流されて、食事と生水を求めて、数日島をさまよった、ということです。

老女は、空腹でボサボサ頭の見知らぬ男をあわれみ、食べ物と飲み物のために彼女の家を招きました。イスタルがサツマイモと米と水を空腹な若い男に出した時、彼のベルトに金の取っ手のついた剣があるのに彼女は気付きました。そして、すぐにその男が夫カルティであることを知ったのです。しかし、若い男が彼女のことがわかるまで、イスタルは何も言わないで、その男に食べ物と水

を、頭を下げてもてなし続けました。カルティは、老女の家で元気で動けるまで、数日留まりました。その間、イスタルは目立たない所において、長い髪で顔を隠して、カルティには、わからないようにしていました。彼女には、夫が今も彼女のことを愛しているかどうかわからなかったからです。

数日して、カルティは老女の家を出る準備をしました。彼が出る前、彼はイスタルに、(彼はまだ気付いていませんでした。) 彼の手を洗うために、水を持ってくるように頼みました。イスタルは頭を下げていたので、彼女の長い髪は顔を隠し、カルティの手に水を注ぎました。水のいくらかが彼女の手にはねかえりました。すぐに彼女の手は、震えて輝き始め、彼女の指先から金貨や銀貨が流れはじめました。

カルティはびっくりして、イスタルの手から流れる金と銀の貨幣を見ました。すぐに彼は真の妻を発見していたことがわかったのです。「イスタル、君か？」彼は目に涙をためて、宣言しました。「イスタル、私の妻、私の愛する人。」彼はイスタルを暖かく、彼の強い腕で抱きしめ、彼女は喜びの涙を流しました。「私たちはもう分かれてはならない。」とカルティは言って、幸せに、妻と抱き合い、口づけをしました。

そして、カルティとイスタルは東へ帰り、老女を連れて行くことにしました。彼らが台所へ入り、老女に近づくと、びっくりすることが起きました。彼らの驚く目の前で、老女は大きな蛇にかわりました。確かに昔、父のカボチャ畑で、イスタルが見たのと同じ蛇でした。カルティはすぐに金の取っ手のついた剣を引き出し、蛇の頭を切る用意をしました。しかし、イスタルが入ってきて、夫に蛇を殺さないように、告げました。「どうぞ、蛇を傷つけないで！」イスタルは嘆願しました。「この蛇は金貨と銀貨を指先から出す力を与えてくれたのよ。」カルティは妻に従い、剣を下ろしました。大きな蛇はズルズルとイスタルの方に来て、頭を起こして言いました。「私の子。私はあなたの死んだ母の霊だよ。」

イスタルは、蛇の言葉に困惑して、泣き出し、フィリピンの神話と伝説 9 . 神秘的な蛇

した。「ああ、お母さん。私をまた残して行かないで。いつも私のそばにいて、私を守って。」

「強くなりなさい、私の娘よ。」と蛇は言いました。「もうあなたは強く、ハンサムな夫がいて、親切な心であなたを世話してくれる。あなたには、もう何も必要ありません。しかし、あなたの生活や幸福が、危険にさらされたなら、私は常に、周りのどこかにいて、あなたを見守り、助ける用意をしているよ。」そして、最後の言葉と共に、大きな蛇は空中に消えました。

カルティは、彼の失った船を見つけることができて、彼とイスタルは、東の家へと向かいました。イスタルは長く失っていた夫とついに再会して、幸福でした。そして、彼らはおそらくこの世で一番幸福だったでしょう。

カルティとイスタルがついに東の家に着いた時、カルティはすぐに彼の部下たちに、シェンと彼女の母を、彼を騙していたことによって、逮捕するように命じました。叔母と彼女の娘は追放されて、離れた、人の住まない島で生活するようにされました。

イスタルの父は、娘にまた会えて大喜びです。彼は娘がしんだものと思っていたのですから。そして、その日から先、カルティ、イスタル、そしてその父は、幸せに長く生きました。

イスタルは、もう蛇は見ませんでした。しかし、彼女は幸せな心で、どこでも、どんな方法でか、彼女の愛する母の霊が彼女を見守っていることを知りました。